

Neues in Nara

Nr.54

2016年1月25日



Japanisch-Deutsche Gesellschaft Nara (JDG-Nara)

奈良日独協会 (会長 河野良文) 奈良市大安寺 2-18-1 大安寺内

Tel/0742-61-6312, Fax/0742-61-0473

<http://www.daijanji.or/jdgn/index.html>

編集: 林 (hayashiy@zeus.eonet.ne.jp) 峯本 (hmine-24@m3.kcn.ne.jp)

“これは会員相互のコミュニケーションツールです。皆様からの情報は編集委員へ”

●行事予定

第11回シュタムティッシュ

日時: 2月7日(日)

場所: ホ・スセリ(東向き北町6、さくらバーガー2階)

会費: 1,500円

会員の松田耕造氏(ドイツ商事社長)から「意外と知らないドイツワインの知識」と題して話題提供を頂き、ワインの試飲会も行われます。ご参加をお待ちしています。

●行事報告

1. クリスマス会

当会恒例のクリスマス会は、12月12日(土)夕刻和ダイニング「花小路」にて開催。大阪神戸ドイツ総領事館より飛鳥井たまきさんがドイツ研修生を同道して参加頂いたほか、留学生6名を交えて総勢40名の盛況となった。会は新入会員の紹介、池上麻衣子さんの「若手会員の集まり」報告、会員の竹村照雄さんによる「森鷗外の奈良五十首」自費出版の経緯が紹介されるなど実に盛りだくさんの内容で進行。その後の親睦会では飛び入り続出、なかでも西尾功・晶子ご夫妻の独唱、平尾英治さんのドイツ語と日本語を駆使した渋みのきいた歌で大いに盛り上がった。フィナーレは、全員でドイツの歌を唄って楽しい夜を飾った。



2. 第10回シュタムティッシュ

11月8日(日)大安寺催事棟にて開催。会員の武舎一夫さんから「マイセン開窯と柿右衛門」と題して、氏のドイツ勤務時代に始まったマイセン磁器コレクションの紹介とともに(左上の写真)、柿右衛門磁器がマイセンに与えた影響の大きさが紹介された。



●会員だより

会員の竹村照雄さんから

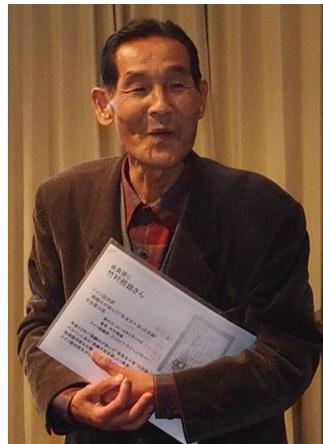
森鷗外「奈良五十首の足跡」を自費出版

この冊子は平成23年(2011)9月に当時所属していた「奈良観光ボランティアガイドの会」のガイド資料原稿を、退会時に自費出版したものです。

鷗外は旧陸軍を退官後、大正7年より10年まで秋の「正倉院」曝涼時に、帝室博物館総長として奈良へ出張し、開封に立会って参りました。その雨天に奈良の古寺、旧跡を巡って、その場所に相応しい短歌を詠み、晩年の大正11年に歌集「明星」に発表したものがこの「奈良五十首」です。

平成24年6月にドイツ・ベルリンにある「鷗外記念館」よりこの小書を蔵書にしたい旨、東京・神田神保町の古書店より依頼があり、さっそく鷗外出身地の津和野「鷗外記念館」より寄贈いたしました。その間メール交換で、ベルリン記念館内がフンボルト大学日本学科の教室でもあることを知り、本書を独逸語の対訳をしてくれる学生さんを紹介して頂き、平成26年(2014)12月になって原稿が届き印刷することが出来ました。

一方、平成25年10月に奈良図書情報館にて「ベルリン・カニジュウス高校」演奏会をチラシで知り、その終了後、奈良日独協会を紹介して頂き、10月17日に入会いたしました。同冊子一部を奈良日独協会にも寄贈致しましたので、会員の皆様にご高覧賜れば幸いです。



●新入会員の紹介

米田 都(奈良市)、中山 伸、中山俊子(奈良市)、広瀬悠三(奈良市)、田伏 薫(大阪市)の皆さんが入会されました。

今回、会員の松本俊郎様から特別寄稿を頂きましたので、特集号として2ページ構成としました。

「ミュンヘン大学研究滞在記」松本俊郎

文部省の在外研究員補助制度により、1987年9月7日から1988年3月18日まで6か月間、西ドイツ、バイエルン州ミュンヘン大学医科工学研究所のレーラー教授(Prof.R.Röhler)の研究室に客員研究員として滞在しました。

1. ドイツとのかかわりが生まれたきっかけ

大学院生だった頃、初めて訪れた国際学会の開催国がドイツだったことです。学会は、ミュンスター大学の「Hals Nasen Ohren Klinik」で開かれました。後々、ドイツ語で、耳、鼻、のどという言葉が話すとき、いつも思い出します。

2. Prof.R.Röhler への志願

先生の研究は学会誌で目を通していました。前年、北海道で国際光学学会が開かれ同教授ご夫妻が学会後、関西に来られる際に奈良の自宅に来ていただきました。初めてのことなので、家の雰囲気を感じてもらうと、とにかく中を案内したり、お茶をたてたり食事をしていただきました。

日本の家に来られるのは初めてのようでした。大変でしたが家の雰囲気を味わっていただけと思いました(写真1)。



(写真1) 食事中の教授ご夫妻(自宅で)

3. ミュンヘン大学滞在記

3.1 大学卒業資格(ディプロム)取得と講義の雰囲気

大学は、全体で20学部から成る総合大学で冬と夏の2学期制です。順調にギムナジウムを出て大学に入るのが19才ですが、大学を出るためには、卒業研究(ディプロムの資格)試験に通る必要があります。これが大変難しく1985/86年の冬学期で29才が卒業者の年齢のピークになっています。例えば卒業研究(ディプロムアルバイト)を行っているスタッフの一人は10年目、他は5年目だと言っていました。もう一つの厳しい点は大学の卒業試験で2回不合格になると永久に受ける資格がなくなる点です。従って、卒業研究を行う学生及びそうでない学生も熱心に勉強しています。教授には礼儀正しく手をあげてよく質問をします。講義が終わると学生は一斉にこぶしを作って机を軽くたたいて感謝の気持ちを表現します。卒業研究で提出された論文のレベルは日本の修士以上だと思います。博士号を得るためには、博士向け研究員(ドクトラント)として指導教授の下で研究を行い認められれば学位を得ます。

3.2 研究室の一日

レーラー教授はサイバネティクスが専門で、さらに新しい光学的測定法の開発及びこれを利用した生体硬組織の力学的特性や自動車の運転中等の視覚系の認識に関する研究を行っておられました。私は、研究室と地下の実験室を使用させてもらいました。昼前になるとスタッフと美術館(アルテピナコテーク)の近くにある大学の食堂(メンザ)に出かけます。四つの定食(メニュー)があり毎日変わります(写真2)。昼食後、いつも休憩する部屋(カフェラウム)に集まり教授とコーヒーや紅茶を飲みながらいろいろと話をします。その中には、スタッフへの連絡や研究上の意見交換、日常的な事柄も話題になります。よく飛び交う言葉は、高い(トイヤー)とか安い(ピリガー)です。



(写真2) メンザからの帰り・ドクトラントの方々と

買い物の節約方針は徹底しているようでした。夕方4時頃からはしばしばパーティーがありました。例えば、10月始めは、ウアラウプをとって旅行から帰って来た人や誕生日を迎えた人あるいは、ドクター論文を終えた人が主催してゼクトやワインの飲物と食物を買ってきて皆を招待します。これがあると夜10時頃迄電灯をつけずローソクの灯りで話をします。

4. ドイツ人の衣食住

ドイツ人は勤め先のために働くのではなく生活または家族のために働きますので、その基礎となる住居についてはいい家具をそろえ快適に過ごせるように時間とお金を注ぎます。例えばレーラー教授はミュンヘン郊外のシュタルンベルガー湖のそばに建てた家に住んでいます。ここを選んだ理由は、市内は大気汚染がひどいこと、ここは静かで空気がきれい、散歩にも好都合、湖の水が飲料に適しているからと言っていました。食事についてですが、質素です。家庭の朝食はパン、バター、ジャムそれにコーヒーです。昼食は勤め先の職員食堂(カンティーネ)、大学の食堂で温かい食事をとります。私たちの教授は、自室で持参のパンを食べていました。衣類もまた質素で有名ブランド志向という現象はありません。靴、バッグを見ますと丈夫で長持ちのする流行を追わない品質本位の物を身に着けています。

以上ですが、日本のように誰もが大学に行こうとする風潮はありません。商店は法律により土曜の午後及び日曜は閉まります。彼らの生活の方が個人を重視した人間らしい生活を過ごしているように思えます。国際化がますます求められる時代、ドイツを理解する上で参考になれば幸いです。

